

いのちの水

二〇一九年

九月号

七〇三号

私たちの戦いは、血肉を相手にするものでなく、…
悪の霊を相手にするものである。
(新約聖書 エペソ書6の12より)

について
(英語に親しんでいない方々
もおられると思われるので、
読み方を付けておきます)

目次

- ・ 生きることは
ー マザー・テレサの詩より 1
- ・ キリスト者の武装 4
- ・ 目覚めていること 4
- ・ 苦難と絶望の中から
ー 詩篇74篇 10
- ・ お知らせ 14
- ・ 集案案内



生きることは…

生きることは美である。それを敬慕せよ

生きることは困難である、それに立ち向かえ。

生きることは悲しみである。それに打ち勝て。

生きることは、賛美である。それを歌え。

生きることは、苦しい闘いである。それを受け入れよ。

生きることは悲劇である。それに立ち向かえ。

生きることは、危険なことに直面することである。勇敢であれ。

生きることは、神の命に生

きることである。その命を

獲得するために闘え。(マザー・テレサ)

ここにあげたのは、次の原文を意味をとって訳したものである。

Life is beauty admire it.

Life is a challenge, meet it.

Life is sorrow -overcome it.

Life is a struggle accept it.

Life is a tragedy, confront it.

Life is an adventure, dare it.

このマザー・テレサの言葉

これらの言葉は、簡潔に

してそれぞれに読む人にとって響くものがあるであろう。

一貫しているのは、この世に生きることの困難、悲しみを深く見据えたうえで、

神を信じ、神を仰ぎつつ、前進していこうとする姿勢

が言われている。

これらの言葉にはあえて神やキリストという言葉を用いていないが、その背後

には神からの語りかけ、神への導きを信じての歩みが

浮かび上がっている。

Life is beauty admire it
(ライフ イズ ビューティ アド

マイ アイット)

Life とは、命、生きるこ

と、人生、生涯、生活：等々の意味を含む奥の深い言葉である。

このマザー・テレサの一連の言葉は、それらの意味を重ね合わせつつ語られている。

最初のこの言葉、生きることは美しい―それを驚きの心、敬慕、感嘆の心をもって受け止めよ。ということである。

しかし、さまざまの人間の人生は、到底美しいとは言えないことがいくらでもある。人間は本質的に罪深く、汚れている。しかしそれにもかかわらず人間のなすことで美しいと感じることも多々ある。

そして、罪深い我々の人生をも愛をもって導いてくださる神がおられるゆえ、その人生もその神の愛ゆえに

美しいものとなる。義とされる―正しいとされるということはまた、汚れを清められ、清いものとされるということであり、美しいものとされるということである。

そしてさらに、そのようにしてくださる神の命こそは、人間に愛の行動を生み出す美を持ち、広大な自然の数々の日々移り変わる美しさの源である。それこそは、永遠の賛美に値するし、じつさい数千年昔から、そのような美に触れた人たちはその美をたたえてきた。

Life is a challenge, meet it.

(ライフ イズ ア チャレンジ ミート イット)

生きることは、困難なこと

である。それに立ち向かえ (challengeは挑戦と訳されることが多いが、例えば、the biggest challenge という表現では、「最大の難事」を意味するように、ここでは、困難なことを意味する。))

日々の困難に、神を信じて、神の愛と真実の導きがあると信じて立ち向かえ。

ダンテの神曲の最初において、高き目の山に登ろうとしたが、たちまち妨げようとする不気味な力が現れた。彼はあきらめようとしたが、神が導き手を送り、その難事に立ち向かって前進していくことが記されている。そのように、神の助け、その力を与えられつつ御国に向って歩みなさい―という意味になる。

Life is sorrow, overcome it.

生きることは、悲しみである。

(ライフ イズ ソロウ オウバカム イット)
人生は悲しみである。それに打ち勝ちなさい。

周囲の至るところに悲しみがある。表面に現れない悲しみがある。主イエスも、そうした世界に対しての深い悲しみをもっておられ、「悲しみの人」とも言われた。

トルストイの「アンナ・カレーニナ」は、彼の代表作の一つであり、小さな文字の三段組で六百頁にもなる大著であるが、その冒頭に「幸福な家庭はすべてよく似ているが、不幸な家庭はそれぞれに不幸である。」から始まっている。

幸せな家庭―それは健康な両親がいて生活は安定し、子供たちともにみな健康でまじめである―といった

内容でよくにている。しかし、不幸な家庭は、家族の問題、病気や仕事、人間関係、貧困、災害：等々実にさまざまである。

(なお、私はこの「アンナ・カレーニナ」を読んで、トルストイの眞価を知らされた。その深い人間の心の動きへの洞察と、この世界の根底に流れている神の眞実と悪への裁き、そして人間を導こうとする神の力を知らされた。ユゴーの「レ・ミゼラブル」とともに、これらの大作の完訳版を読んで、ヨーロッパの文学の本質がいかに日本の文学と異なるかを深く知らされた。)

何十年か昔、行きつけの自転車店に修理で行ったとき、その店の高齢のおばさんが、私と二人きりになったとき、「家の中ってどうしてこんなにうまくいかないんだらう。どないしたらいいんだらう：」と家族問

題の困難さを私にもらしてその表情に深い悲しみをたたえておられたのを思いだす。

そして幸せと見える家庭も、たいていは一時的で思いがけないことが人生のうちでは生じて苦しみに巻き込まれる。

「どうしてこんなに、この世は悲しみに満ちているのか」とかつてヒルティが書いていたことをが思いだされる。

キリストも、山上の教えのなかで、とくにこの人生に深く流れている悲しみからの救いを指し示されて言われた。

「ああ、幸いだ、悲しむ者たちは！」

その人たちは(神によって)慰められるから。」

打ち倒されるような悲し

み若い日々には想像もしなかつたそのような悲しみに対しては、神の助けとその愛を受けるのでなければ、人の心は硬くなつて、生き生きとした力を失つていく。他者には決してわかつてもらえないその悲しみはただ神のみが、わかつてくださると実感したとき、それに打ち勝つ道を見いだしたことになる。

Life is a song, sing it.

生きることは、賛美することである。賛美しよう。

聖書の詩編の最後の部分は、この世のさまざまの苦しみや悲しみがあるにもかかわらず、神への賛美、感謝で繰り返されている。

使徒パウロも、「すべてのことを喜べ、すべてのことに感謝せよ」と言っている。

主にすがる われに

悩みはなし

十字架の御許みもとに

荷を下ろせば

(折り返し)

歌いつつ歩まん

ハレルヤ！ ハレルヤ！

歌いつつ歩まん

この世の旅路を

(新聖歌三二五より)

(*)ここに引用したマザー・テレサの英語の詩は、韓国の元眼科医の具本術氏から送られてきたものです。

具氏は、戦前の日本で学ばれ、無教会の指導者たちからキリスト教信仰を学ばれ、現在高齢ですが、以前から「いのちの水」誌を読んでくださっていて、時には電話を、また折々に協力費とともに感想や植物写真なども送ってくださっていて感謝です。

キリスト者の武装

キリスト者は武装などしない。と思っている人にとつては意外であろうが、キリスト者も武装することが強く勧められている。

しかし、それは武装といっても、目に見える銃や砲弾、戦車などによる武装でもちろんない。

それは、目には見えない神の賜物によって武装することなのである。

いかに新約聖書からこのことを記した箇所から、キリスト者でない方々にもわかりやすいと思われる表現に変えて説明的に記した。

：最後に言う。主に依り頼み、その偉大な力によって強くされなさい。

悪魔の策略に対抗して立つ

ことができるように、神の武器を身につけなさい。

私たちの戦いは、血肉を相手にするものでなく（目に見える具体的な人間とか国家、民族に対する戦いではない）、暗闇を支配する者、高いところまで及んでいる悪の霊を相手にするものである。

だから、神の武器を身に付けなさい。（神からの賜物によって武装せよ）

服をしっかり身に付けたために、真理をもって帯とせよ。

命を守る胸当ては、神の正義であり、履物としては、平和の福音を告げる準備をもってせよ。どのような戦いにあつても、つねに真理そのものである福音を伝える心をもって闘え。

盾は信仰である。それによつ

て敵対する者たちが放つ火の矢をすべて消し去ることができる。

兜としては、救われたという確信とその事実であり、それが私たちを守る。

武装の中心となる剣として

は、神の言葉がそれである。それは聖なる霊そのものである。これこそは、闇の力を根源的に打ち破り、愛や

真実の心をもたらしものだからである。

それらすべてを整えて霊的な武装の根底にあるべきものが祈りである。

どんなときにも、聖霊に助けられ、導かれて祈れ。

私たちの戦いは、具体的な悪人とか特定の民族や国家という目に見えるものに対するものでなく、それらを支配する悪の力、悪の霊そのものとの戦いであるゆえ

に、私たちの戦いとしての祈りも、聖なる霊に導かれる祈りでなければならない。

いかに悪の力が強くとも、霊の目を覚まして根気よく、祈り続けよ。（エペソ書6章10〜18より）

「目覚めている」ということの重要性について

世の終わり、あるいは、その日はいつくるのか、という問いかけに対して、主イエスは、「人の子（イエス）も知らない、天使も知らない」と言われた。

肉体をもっておられたときのキリストは、人間でもあったゆえに、限界をもつておられた。空腹になり、疲れもあり、喉も渇く。

同様に、この世の終わり

がいつくるのか、そのよう
な遠大な出来事に関して
人間として歩まれていたイ
エスは知らないと言われた。

(現在生きて働いておら
れる復活したキリスト、聖
霊は、神と同じ本質の存在
なので、それらすべてを知っ
ておられる。)

いつ来るのか、それはわ
からない。しかし、いつ来
てもよいように、備えをす
ることはできる。それが目
を覚ましているということ
である。

：だから、目を覚ましてい
なさい。いつの日、自分の
主が帰って来られるのか、
あなたがたには分からない
からである。(マタイ24の
42)

しかし、目を覚ましてい

ることが特に重要であるの
は、世の終わりに備える
ということと共に、毎日の生
活において、不可欠のこと
であり、私たちが常に心注
いでいなければならぬこと
とだからである。

使徒ペテロは次のように述
べている。

：身を慎んで目を覚まし
ていなさい。(*)

あなたがたの敵である悪
魔が、ほえたける獅子のよ
うに、

だれかを食い尽くしようと
探し回っている。(Iペテロ
5の8)

(*) 「身を慎んで」これは原語は
ネーフォー repho であり、酒に酔う
と自分を制御できなくなるが、それ
とは逆に、みずから自分を支配する
理性的であり続ける (be self-
controlled) とした意味。

この世界は、周囲の日々に

接する自然を通して、神は
いつも私たちに語りかけて
おられる。神は愛であり、
生きて働く御方だからであ
る。青い空、真っ白い雲の
形を動き、その色合いを見
ているだけでも、神様のさ
まざまのかたりかけを感じ
る。

タンへの働きがそのように激
しく人を呑み込もうとして
いるなど考えられないかも
しれない。

しかし、神からの啓示によつ
てペテロはそのことを知ら
されていた。

かつてペテロもそうしたサ
タンに呑み込まれようとし
た。それは、イエスが、自

他方、それとともに、この
世には、そうした神の語り
かけを分らせないようにす
る力、目を覚ますのでなく、
眠り込ませる力が働いてい
る。サタンの力、闇の力で

あり、それは常に私たちの
魂に働きかけて真実なもの、
清いものから引き離そうと
している。

飢えたライオンのように、
サタンも吠えて獲物を得よ
うとして探しまわっている
というのである。この世を
表面的に見るだけなら、サ

分は近い内に、民の指導的
な人々から捕らえられ殺さ
れる。しかし三日目に復活
するということを予告した
ことがあった。それを聞い
たペテロは、こともあろう
にイエスを脇に引き寄せ、
「そんなことがあってはな
りません」と、いさめ始め
た。

そのときイエスは、「サタ
ンよ、退け。お前は神のこ
とを思わず、人間のことを
思っている。」(マタイ16の

23〜24)と厳しく叱責された。

このように、神の示す真理を全く受けとろうとせず、人間的な考えを全面に出すといったことにおいても、サタンによって呑み込まれているのだと言われたのである。

これは、驚くべきことで、それなら私たちの日常生活に絶えずそのことは生じていることになる。

主イエスのたとえにあるが、清められた家のたとえは、家をきれいにして掃除してかざりつけまでしても、そこから一時的に汚れた霊(悪霊)は出て行くが、またほかの七つの悪霊を連れて入り込む。そうすると前よりも悪くなる。(マタイ12の43〜45)。

そのように、単なる一時的な決心とかで正しく歩もう

とか、やさしくしようなどと決心してもそれは束の間で、自分の内に巣くう罪の力はそうした人間の決心など簡単に吹き飛ばしてしま

う。それゆえにそのたびにその罪からの赦し、罪の力からの解放を与えられる必要がある。日々新しくされることが必要でそのために、聖霊の風を日々受けて悪霊の力を追い出していただくねばならない。礼拝もそのためにある。御言葉と聖霊によつて入り込もうとする汚れた霊を追い出す力を与えられるためである。

目を覚ましている―このひと言の重要性は、一見したところよりはるかに広大な世界を含んでいる。(*)

(*) バツハに「目覚めよと呼ぶ声あり」(Wachet auf, ruft uns die Stimme・英訳は Awake, the voice is calling us)という有名な作品がある。これは、マタイ25章の10人の乙女とキリストの再臨に関する記事があり、そこでキリストは、目を覚ましていることの重要性を強調された。その記事をもとにして1599年にフリーリップ・ニコライが作った讚美歌(詩)があり、バツハはそれを用いた。

この曲は、神が私たちに直接に語りかける呼び声を思い起こさせるし、神に召された多くの人々、そして御使い、さらには、私たちの周囲にある大空や白い雲、さまざまの草木など自然そのものが私たちに「目覚めよ」と呼びかけているのを思い起こさせてくれる。

あるイギリスのバツハ研究者は、「バツハのこの作品は、弱いところがなく、単調な個所もなく、技術的にも、情緒的、心を揺さぶるといった面においても、霊的にも、最も高い内容をもっている。」また、別のドイツのバツハ学者は、この曲について、「非常に美しく、成熟したものであり、同時に、最も広く知られたキリスト者のためのカンタータである」と述べている。

戦前の日本においても活動的な人たちが、さまざまの

芸術や学問、商工業などに熱心な人たちは数知れない。

しかし、そこに悪の霊、汚れた霊が入り込み、政治家や軍部、また学者や教育者、そして社会のあらゆる分野の人たちをも巻き込んで、中国への侵略戦争をこともあろうに聖戦と称して、国家全体がその方向へと突き進んでいった。その結果一千万をはるかに越えるおびたらしい人たちが殺傷された。

目を覚ましている、それはこのように、単に個人の心の問題ではない。人間が霊的に眠ってしまうとき、ありとあらゆる罪深いことがなされていく。戦争などその最たるものであり、集団殺人、略奪、脅迫、性に関わる犯罪、放火、差別、徴用工や従軍慰安婦といった

弱者虐待、自然破壊：等々。こうしたことが生じるのは、政治家や軍部、また企業の経営者など、そして国民も、霊的な目が見えなくなつて、正義も愛もわからなくなつてしまった結果であつた。

目を覚ましていなさいーというキリストの言葉は、こ

うした歴史的、社会的、政治的方面にまで広くあてはまる言葉なのであり、単に机上の本を読んで、狭い自分の精神世界だけを見て、自分は目を覚ましていないなどと、自己満足に陥つてしまつてはいけないーそういうこともこの短いひと言は指し示している。

また、人間を見る場合でも、表面的に、プロスポーツで優勝したとか、オリンピックで金メダルをとつたとか、

大会社の社長、政治家、ノーベル賞とかに関する人たちは多くの人たちがほめたたえる。テレビや新聞なども、それらの人たちには大画面を提供し、あたかも何かとても偉大なのだーというような雰囲気を作り出している。

しかし、そうしたことの背後にいかにかネの力や、権力、人間のさまざまの欲望、競争心等々があるかを知らなければ、それらは、清い美しさとか真実とは遠いものだとは知らされる。

こうした日々、テレビやインターネット、新聞などで大きく報道されていることも、霊的に目覚めていなければそうしたこの世の風に巻き込まれていく。

目を覚ましていなければ、

どのようなことが期待できるのか。

霊的に目を覚ましているなら、神の愛が感じられるようになる。

私自身、学校の勉強をいくら熱心にしたところで、霊の目は開けることはなかつた。知識は増えるし、考える世界も幅広くなる。しかし、霊の目は開かれなかつた。かえつて、大学に入学して1年過ぎたころから、

歴史上最も激しい学生運動のさなかにあつたこともあり、次第にさまざまの問題に関して解決の道筋の見えない迷路に入り込んだような苦しい状況に直面するようになった。それは私の健康上のことや家庭の問題も深く関わつていた。

どうしたらそうした苦し

いところから脱することが

できるのか、いくら考えてもわからなかつた。

大学の教養課程の社会学、教育学、哲学：など受講しても、また専門教科につながる物理や数学、化学関係の学びや実験など重ねても同様で、まつたくそのような苦しい状況は変わらなかつた。

そうした状況のなかに、姉が大学在学中、教授の推薦があつて購入して本棚に置かれていた一冊の小さな本(「学生に与う」河合栄治郎著)によって、初めて真理とは何か、善とは美とは、勇気とは、教育(パイディア)とは、さらに国家や法とは何かということを探求していくソクラテス、プラトンの哲学に目が開かれ、戦前に発行されていたプラトン全集(全国書房版)

などを求めて読み始め、初めて真理愛、英知への愛（フィロソフィア）の広大さを知ることになった。その追求の仕方、思索は私の以後のものの方の考え方に関して今なおその探求の精神が私のうちで持続しているほどの重要性を持つことになった。

それでも、苦しみや悩みは終わることはなく、魂の深いところでの根本問題は解決しなかった。そのようなとき、キリストの真理と出会った。それも一冊の小さな本（「キリスト教入門」矢内原忠雄著）によってであった。それが、霊の目が開かれることにつながった。こうして霊の目が開かれることによって、十字架や復活の真理、そしてそこに込められた神の愛が実感で

きるようになった。

さらに、信仰を与えられる以前から、私が深い霊的影響を受けたのは、山を代表とする自然の世界であったが、キリストによって目が開かれて以来、そこに愛の神が創造されたゆえに、それらの自然に込められた神の愛や真実、そしてその全くの汚れなき清さにも目が開かれていった。

自然の美や清さは、キリスト者でなくとも、大多数の人たちにその程度の差はいろいろとあっても、感じられる。キリスト者との違いは、前述したように、その美や清さは、神の愛から出ていると信じていることができることにある。

人間が何らかの音楽、絵画や彫刻など芸術作品を作るときには、そこにその人の

気持ちや精一杯込めて作り上げようとする。神は愛であるゆえ、その神が創造した作品たる自然も一つ一つが神の愛が込められていると信じていることができる。愛は一つ一つをその心を注ぎだす。人間は愛する力がごくわずかしかないので、愛の対象はごく一部に限られている。

しかし、神は全能であり、それゆえに一つ一つに無限の意味と愛を込めることができる。

神は愛である、という聖書の言葉を信じるならば、その愛なる神が創造したのもまた愛が込められているというのは必然的である。

自然のなかには、到底神の愛があるなどと受け入れられないような生き物や現象も数々ある。しかし、そう

したことも私たちには分からないが、その背後に時間や歴史を越えて深い神の愛の御計画が存在するのだと信じるように、導かれる。論理や言葉でみなわかるのなら、信じる必要はない。不可解だからこそ、信じるのである。

そして、神の創造されたもののうち最も愛を込めて創造したのが、人間である。神のかたちに似せて創造したと言われているとおり、ほかの動物には存在しない霊的な能力がある。「祈り」、「目に見えないものを信じる力」、目には見えない過去や未来をも考えること、あるいは天よりの啓示を受ける能力などさまざまなものが与えられている。

目覚めている―それは学問や地位が高いとか、何ら

かの賞をもらったとかとは

関係がない。福音書には、

ある盲人が、道端に座って

物乞いをしていたが、通り

がかつたのがイエスだと知っ

て、必死で「ダビデの子よ、

憐れみたまえ！」と叫び続

けた。周囲の人たちが、叱

りつけて黙らせようとした

が、その盲人はますますひ

どく「ダビデの子よ、憐れ

んでください！」と叫び続

けた。

周囲の人たちは、盲人の

孤独や苦しみ、だれにも聞

いてもらえない深い悲しみ

が見えなかった。言い換え

ると、そうした弱い人たち

の心に対して、人々の霊の

目は眠っていたのである。

さらに、自分たちもキリス

トの本質が見えていなかっ

たのが露呈された。

人たちから、おそらく家族

からもうとんじられて街角

で乞食をしていた盲人は、

霊的に目覚めていたゆえに、

イエスがダビデの子孫とし

て現れるメシアであり、神

の力をもっておられるゆえ

に、見えない目も見えるよ

うにしてくださいさると直感し、

「ダビデの子よ、憐れんで

ください！」と叫ぶこと

ができたのであった。

このように、盲人ゆえに

何ら仕事もできず、地位も

なく、権力もお金もないよ

うな思いがけない人が、か

えって霊的に目覚めていた

ことを示している。

目覚めていたゆえに、イエ

スに関するわずかの情報で

あつても、イエスこそは、

神の子(神と同質の御方)

であるという根本的に重要

のである。

また、水野源三という詩

人は、子供のときに赤痢で

高熱を出して、脳性マヒと

なり、以後は言葉も発する

こともできず、起き上がる

こともできなくなつた。そ

のような著しい重度の障が

いを持つようになったが、

のちにキリスト者となり、

あふれるいのちの水のよう

なみずみずしい詩を書くよ

うになつた。

それは、まさに日々霊的

に目覚めているところから

生まれたものだった。

「目覚めている」とは、祈

りの心であり、呼吸のごと

くーと言われるほどに深く

なつていく。それはまた聖

霊によって導かれている歩

みでもある。言い換えれば、

われたように、まず神の国

(神の愛や真実による御支

配)と神の義を求めると心で

あり、そこから、身近な自

然の大空に生じるさまざま

の雲や空の姿や色、形、み

じかな草木のすがた、形、

香り：などに接してもつね

に心を向けてそこから人間

にない清いもの、美しいも

のに触れていることである。

また、感謝できることを数

えて感謝をつねにする。み

ずからの罪を知り、十字架

を仰ぎ罪の赦しを受ける。

復活の力を与えられる。

主ご自身が示された祈り

(主の祈り)を単に唱える

のでなく、その意味を思い

つつ祈る心でもある。

毎日の朝、目覚めなければ

何もできないと同様に、霊

間的にも目覚めなければ、人

それに對して、あらゆる

な真理を敏感に感じ取つた

言い換えれば、イエスが言

間には自分中心に万事を考え

てしまう。そして、本当に真実なこと、隣人を無差別に愛するとか弱き者、あるいは敵対するような者に対してもその人の魂がよくなるようにと祈るような、神の愛にかなうことは何もできない。

それゆえに、私たちはみずからの心の弱さや罪深さを知りつつ、絶えず神を仰ぎ、目覚めて歩めるようにと祈り願っていききたいと思う。

：従って、ほかの人々のように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んで(神の力を受けて、人間的な思いや欲望に支配されないようにして) いよう。

(イテサロニケ 5の6)

苦難と絶望の中から

1 詩篇第74編

神様、なぜ、我らを永遠に捨ててしまうのか。なぜ、あなたの羊に怒りを燃やされるのか。(1節)

昔あなたが手に入れられた部族の群れを、(2)

あなたが住まわれたシオンの山を思い出してください。永遠の廃墟に、あなたの足を向けてください。敵は聖所で、すべての物を破壊した。

あなたに敵対する者は聖所の中でほえるように叫び、彼らのしるしを立てて、しるしとした。

彼らは上の入口では、おのをもつて

木の格子垣を切り倒した。また彼らは手おのと鎚とをもつて

聖所の彫り物をことごとく打ち落した。

彼らはあなたの聖所に火を放ち、それを汚して、地に倒した。

彼らは心のうちに言った、「我らはことごとくこれを滅ぼそう」と。

彼らは国のうちの神の会堂をすべて焼き払った。

我らはもはや自分たちのしるしを見る事ができない。預言者も今はいない。(9)

いつまで続くのか、我らの中には、知る者もない。神様、敵対する者はいつまであざけるのか。

敵は永遠にあなたの名を侮るのだろうか。

なぜあなたは手を引っ込めておくのか。

なぜ、あなたは右の手を、ふところに入れたままにしておられるのか。

神は、昔からわが王。この地のただなかで、救いの業を行われる方よ。(12)

あなたは力をもって海を分け、大水の上の龍の頭を砕かれた。

あなたはレビヤタンの頭をくだき、これを野の獣に与えてえじきとされた。

あなたは泉と流れとを開き、他方では、絶えることのない大河をも涸らされた。

昼はあなたのもの、夜もまたあなたのもの。あなたは光る天体と太陽とを設けられた。

あなたは地のすべての境を定め、夏と冬とを造られた。

(17)

主よ、敵はあなたをあざけり、愚かな民はあなたのみ名をのしる。この事を心に留めてください。(18)

どうかあなたのはとの魂を野の獣にわたさないで下さい。

忘れないでください。

苦しむ者たちの命を永遠に忘れないで下さい。

この詩は、歴史上で実際に生じた大いなる民族全体の苦難のときに作られた。それが、この詩全体にその背景として置かれている。

苦しめられている者が、再び辱められることのないように、

それは、はじめの部分3節によつてもうかがえる。

苦しむ人、貧しい人が、あなたの名を賛美できるようにしてください。

神に逆らつてユダヤの民に襲いかかつてきた敵が、聖所すなわち神殿の内部の最も重要な場所にまで侵入し、破壊し尽くした。

神さま、立ち上がつて、ご自分のために争つてください。

6節にも武器を持つて神殿の大切な飾り物を全て破壊し、聖所に火をつけて燃やしてしまつたとある。このように神殿を徹底的に破壊し、さらに他の会堂を全て焼き尽くした。

あなたに敵対する者の声を忘れないでください。

イスラエルの歴史上、このようなことは二回程起こつ

絶えず起こす混乱を

ており、そのうちの一回は紀元前587年の新バビロニア帝国が攻めてきたときである。バビロンから軍隊が来て、ソロモンの神殿を徹底的に破壊し、王が連れ去られたり、殺されたり、遠いバビロンまでたくさんの方が連れて行かれた。

べさせようとしたり、安息日を守つたら殺してしまうような迫害があつた。

それから400年ほどあと、紀元前168年になつて、アンティオコス・エピファネス4世がユダヤの民に襲いかかり、厳しい迫害を行なつた。

この詩はこれらふたつのうちのどちらかのことを書かれたとされている。どちらにしても、民族的、国家的に存亡な危機の中で作られた詩である。

これは旧約聖書続編のマカベア書に詳しく書かれている。

日本は、太平洋や日本海に囲まれ、世界の文明の中心地や広大な領域を支配した歴史的な大国からは遙かに遠く離れていたこともあつて、外国から日本の国土に敵が大挙して日本に侵入、攻撃されて、日本民族や国家そのものが滅ぼされようとするような危機は、ほとんどなかった。

そこでは、神殿を焼き尽くし、聖書を持っている者がいたら、全て焼いてしまつた。また、彼らが絶対にくたしようとしなかつた豚肉を、口に押し込んででも食

外国の侵入、攻撃といえば、1274年と1281年に蒙古が襲来した時があるが、九州本土に上陸しての大きな戦い

ようなことは二回程起こつ

た。また、彼らが絶対にく

た。また、彼らが絶対にく

にもならなかった。

太平洋戦争のときにおいて
は、アメリカが沖繩を徹底
的に爆撃、攻撃を加え、地
上での激しい戦闘となつた
が、九州本土での陸上の戦
いにはならなかった。

このような地理的に特別な
状況にあるために、イスラ
エル民族が経験した国家存
亡がかかる戦争というもの
はなく、この詩に記された
ような状況を具体的に実感
をもって思い浮かべること
が難しいと言えよう。

この詩は、自分たちが経験
している恐ろしい苦難に直
面し、長く唯一の神を信じ、
神ご自身が選んだのに、ど
うしてこのような民族存亡
の危機に遭遇させるのか―
という深い問いかけから始
まっている。

そして、これがこの詩篇全

体を貫く思いとなっている。

1節、この詩は冒頭から、
切実な叫びから始まっている。
「なぜ我らを永遠に突
き放し、捨てたのか」これ
はもう回復不可能ではない
かというような状況だった。

にもかかわらず、その背
後には神がおられて、神が
何らかのことで怒られてこ
んな裁きを与えられた。で
も、どうしてそんなにまで
されるんですかというよう
に、どんなことがあっても、
それを神様と結びつけよう
としている。

はるか昔から神様の民であつ
たではないですか。荒廃し
た現状を見て、何も変化が
起こらなかつたら、神様は
おられるのかという気持ち
になる。

しかし、神などいないと
は言っていない。ここが聖

書の民の、神をどんなこと
があつても、見つめ続け、
訴え続け、叫び、祈り続け
るといふ姿勢である。

どうして突き放したのか。
どうして捨ててしまったの
か。戦争のあとの時代に生
きる私たちは、国の中心の
町が敵軍によって徹底的に
攻撃され、焼かれ、多くの
人々が殺されるところを目
の当たりにしていない。だ
からそのときにどんな気持
ちになるかというのは、と
ても直観的に想像すること
は難しい。

この詩に接するとき、この
ような絶望的状态から、作
者がどのようにに神に気持ち
を向けていったのかが分か
る。今から2000年の前の人
の心をそのまま現代に残し
たものであり、いわば心の

世界がそのまま保存された
化石のようなものである。

9節以降、今は神の言葉が
存在しないかのように、現
在と未来にわたる真理を語つ
てくれる預言者もいない。
しかしこの時にはエレミヤ
がおつた。9節にあるよう
な嘆きは、しばしば私たち
ももつ。神様がおられるの
は分かるけど、いつまで、
あるいはどうしてこのよう
に放置しておられるのかと
いう切実な問いである。

12節から、大きな転換になつ
ている。

：神は、昔からわが王。こ
の地のただなかで、救いの
業を行われる方よ。

あなたは力をもって海を分
け、大水の上の龍の頭を砕

かれた。

あなたはレビヤタンの頭をください、これを野の獣に与えてえじきとされた。

あなたは泉と流れとを開き、他方では、絶えることのない大河をも涸らされた。

昼はあなたのもの、夜もまたあなたのもの。あなたは光る天体と太陽とを設けられた。

あなたは地のすべての境を定め、夏と冬とを造られた。

(12〜17節)

天地創造の永遠の昔をこの作者は見つめる。13節に海を分けたとあるが、これは創世記の一番最初のこと、海は荒れ狂う。海は日本人の一般的なイメージと全然違うことを知っておく必要がある。そんな海、悪魔的な力をもそれを支配、

制御したお方である。また

海の中にすんでいると思われた悪魔的な力を竜やレビヤタンと見なしていた。こ

のような竜やレビヤタンなどという言葉が出て来ると、神話的な感じがして、私

ちと関係がないように思われがちだが、当時の人の宗教観を知っていないから

そうなってしまう。今で言え、サタンの力も打ち砕いたということである。

泉や川を開かれたというの

は、エデンの園のことである。絶えることのない大河の水を枯らされたというのは、出エジプトの時である。

川ではないが、川のように見立てて言っている。光を放つものというのは星のことである。

このような人間には絶対出

来ない、壮大なことをはるか昔になされた。その創造の神に立ち返ったら、今直

面する非常に困難な問題でも、必ず神様が最善に導いてくださるといふ確信に導かれる。

このように過去の神様の万能の力に立ち返った上で、再び祈りを始めている。私

たちも神の万能と、神の愛を信じ切れないときにこのような気持ちになる。この人も精神的に非常に危ない

ところまで来ていたが、万能の神に立ち返ることが出来た。

18節にある、御心に留めてくださいというの、「思い出してください、覚えてください。」(Remember me-)

といった意味を含んでいる。

19節の貧しいは、単に経済

的に貧しいだけでなく、圧迫されている、苦しむ人である。鳩の魂。鳩は柔和な

イメージでカラスのように攻撃的でない。

20節に地の暗い隅々には不法の住みかがひしめいてるとある。これは追い詰められ、破壊された世界には、

どうも闇の力がひしめいている。要するに敵の攻撃と共に、霊的な闇の力で非常に追い詰められているという感情が表われている。

私たちも、覚えていてください、憐れんでくださいとしか言えないときがある。そして神の真理に逆らう人達をどうか滅ぼしてください。

この詩はたくさんの詩の中
では、国家的、民族的な大
いなる苦難という特別な時
代の状況の中で生まれた、
切実な叫びであって、すべ
ての者が闇の力、残酷なサ
タンの力に流されそうなど
ころから、天地創造の神に
留まり、どんな状況であつ
ても神を聖とし、全能の神
は、時が来たらその力を振
るおうとしていると信じ、
ただ一点に寄りすがって、
困難な状況の中で信仰によつ
て祈り、神に向つて叫び続
けている内容となつている。
それゆえに、現代に生きる
私たちにあつても、それぞ
れ直面する苦難や悲しみは
異なるが、こうした数千年
前の人の切実な信仰の姿勢

に強く励まされる思いがす
る。
お知らせ

○「祈りの友」合同集会

9月23日(月) 休日。

午前11時〜午後4時

場所：徳島聖書キリスト集
会 集会場の住所は、
徳島市南田宮一丁目1の47

問い合わせは、左記の吉
村孝雄まで。

「祈りの友」会員以外の参
加も自由です。参加申込は、
貝出久美子宛て。
staurostoko@na.pikara.ne.jp

電話 090-1176-9040

会費 500円(昼食代金)

○8月24(土)〜25日

に京都市の関西セミナーハ
ウスで開催された近畿地区
無教会集会の録音CDがあ
りますので、希望の方は、
左記奥付の吉村孝雄まで。

このCDは、その録音以外
に、8月の徳島聖書キリス
ト集会の主日礼拝、夕拝の
録音も含んだ内容となつて
います。価格は送料込で5
00円。

○今月号は校正する時間がなく、
入力ミスその他などあるかと思
います。気付いた点は、電話、メー
ルとかでお知らせくださいば、イ
ンターネット版では訂正できま
すのでお願いいたします。

徳島聖書キリスト集会案内
・場所は、徳島市南田宮一丁目1の47

徳島市バス東田宮下車徒歩四分。

(一) 主日礼拝 毎日曜午前10時30分
〜(二) 夕拝 第一、三火曜夜七時30
分から。 毎月第四火曜日の夕拝は
移動夕拝で場所が変わります。(場所
は、徳島市国府町のいのちのさと作業所、
吉野川市鴨島町の中川宅、板野郡藍住
町の奥住宅、徳島市城南町の熊井宅)
です。

☆その他、第二水曜日午後一時からの
集会が集会場にて。また家庭集会は、
板野郡北島町の戸川宅(毎月第二、第
四月曜日午後一時より。第二水曜日
夜七時三十分より)、海部郡海陽町の
讚美堂・数度宅 第二火曜日午前10時よ
り)、徳島市国府町(毎月第一木曜日
午後七時三十分より「いのちのさと」
作業所)、板野郡藍住町的美容サロン・
ルカ(笠原宅)、第二金曜日の午後8
時から徳島市応神町の天宝堂(網野宅)、
徳島市庄町の鈴木ハリ治療院では第一
月曜日の午前0時からなどで行われて
います。

著者・発行人 吉村孝雄 〒七七三〇〇一五 小松島市中田町字西山九一の一四 電話 080-6284-3712 固定電話(FAX兼用) 0885-32-3017

「いのちの水」は自由協力費です。郵便振替口座 〇二六三〇一五五五九〇四 加入者名 徳島聖書キリスト集会 協力費は、郵便振替口座か定額小為替、または200円以内の未使用の切手なら古きものでも結構です。 E-mail:emuna@ce.ocn.ne.jp http://pistis.jp (「徳島聖書キリスト集会」で検索)